

## 1

## 奈良時代の『金光明最勝王経』の修法と香薬

安部 郁子

公益財団法人 研医会

奈良時代、聖武天皇と光明皇后は『金光明最勝王経』の功德をもって国を守ろうとした。そして、この経典で説かれる「澡浴」「香」「医療」ということに関心を持っていたのではないかと思われる。その理由を述べたい。

**【方法】**『西大寺本 金光明最勝王経古点の國語學的研究』春日政治：著（勉誠出版 2013年）を使い、『金光明最勝王経』の内容を確認する。そこに述べられた仏教の医薬に対する考え方、傷病者に対する考え方を把握し、この経典を重要なものとしていた聖武天皇と光明皇后が目指していた仏教による護国の具体的な方法について探った。また、当時行われた密教修法について、寺院の伽藍、伝世品、伝説、また『続日本紀』『国家珍宝帳』『種々薬帳』正倉院文書、『本草和名』『医心方』などを通して考えた。

**【結果と考察】**『金光明最勝王経』の大弁財天女品第十五では呪と薬と洗浴の法が説かれる。また顯空性品第九や除病品第二十四ではインド古代の身体観や疾病観、病因説が述べられる。国ごとに国分寺を建立させそこに『金光明経』『金光明最勝王経』『法華経』を納め、それらを転読せしめた聖武天皇と光明皇后がこの経典を大切なものとしていたことは明らかである。さらに最初は「小僧行基」と批判していた僧侶・行基の傷病者に対する看護や保護に対してしだいに理解を示し、ついには大仏造立と東大寺の建立に行基を取り込んで、事業を進めていったことを考えると、聖武帝らも傷病人への医薬の施しについて積極的に取り組もうとしていたように思われる。

その中で、正倉院文書や伝製品の書きつけに記録の遺る「大弁才天壇」の修法は、この『金光明最勝王経』の大弁財天女品第十五にあるものではなかったかと推測される。光明皇后が春日奥山の清水の湧く山中に香山寺（こうせんじ）を作ったという『延暦僧録』逸文「仁政皇后菩薩」伝の記録を信じれば、日本古来の水の信仰と仏教での水や湯、香薬を使った修法が溶け合った場として、最適ではないかと思われる。香山寺の址と考えられている場所には、今は春日大社の末社である鳴雷神社（なるいかづちじんじゃ・高山龍王社 こうせんりゅうおうしゃ）、高山神社（こうせんじんじゃ）があるが、水分の神をまつる鳴雷神社には水底に下りていく階段を持つ丸い池があり、高山神社には「水船」と呼ばれる石の棺のようなものがある。現在の池や「水船」は鎌倉時代より後に造られているにしても、それ以前に同様の宗教的施設があったのではないかとも思われる。『金光明最勝王経』に語られる大弁才天の澡浴のある修法に使われたとは考えられないだろうか。

大弁財天女品第十五には32味の梵語の生薬名が出ている。大正刊の『國訳金光明経』（国民文庫刊行会 1917）や『仏典講座13 金光明経』（壬生台舜：著 大蔵出版 1987）の翻訳をみて、『本草和名』『医心方』にあるかどうかを調べると32味のうち、30味については何らかの記載があり、現物がなかったにせよ、知識はもっていた可能性がある。海外から将来したり、諸国から熱心に薬物を集めていたことを考慮すると、医薬品としてはもちろん、こうした密教修法に使う目的でも薬物の収集に努力していたと考えたい。

平安時代末期、僧珍慶が東大寺に浴室の費用を賄う田地を施入した寄進状に「光明皇后、十千の道俗を浄め、阿シユク歡喜して光を現す」（東南院文書）とあり、こうした伝説が後に皇后の千人を風呂に入れたという伝説に発展するが、その最初の事実として、皇后が澡浴の修法を行ったのではないかと推測している。